

「8」。空観には真の意味と目的がある。それは縁起の立場に立って戯論を寂滅することである。すると縁起の故に空となり、空なるものが縁起になる。縁起は存在の理法であり、先生の謂わゆる「自性そのものがその成立のために縁起関係が必要とするのである。」この場合先生の謂ゆる自性とは空を超えた有であり、書簡の「禅の観点」を「仏教の観点」に置き換えれば、先生の立場は一貫している。「空」に否定の意味を見ると同時に肯定の意味を見る考え方がナーガールジュナに「中道」と呼ばれている考え方であり、自性と縁起の関係を考える上で重要であると先生は考えておられる。

縁起は無自性という存在構造が却って自性的有になり、私が「真空妙有の論理構造」（『仏教における聖と俗』所収）で述べたように、排中律排除の論理「 $\neg \neg \neg \neg$ 」（空即是色）の木村の公式がここにも成立するのである。

受戒慥度に於ける仏伝

龍口明生

はじめに

諸部派の律藏の中、『パーリ律』、『四分律』、『五分律』の受戒慥度には所謂仏伝が説かれている。この部分を仏陀の伝記と単純に見なすことについては問題である。このことにつき、既に種々論ぜられている。また所謂仏伝が語られる目的について、

も検討が加えられ、受具足戒の儀式が幾つかの段階を経て、最終的な形式である三師七証による十衆白四羯磨が制定されるに至るまでの経過を述べることを目的とするものであるとされている。ここでは『四分律』卷第三十一「受戒慥度」を取り上げ、釈尊自身の受戒ということについて検討してみたい。

一、受戒の意義について。受ける戒の種類により、その意義も一様ではないが、後に受具と見なされる受戒は、比丘となることであり、そのことはまた僧伽の一員となることを意味する。

二、『四分律』「受戒慥度」に於いて使用されている釈尊の呼称に注目するに、釈尊の誕生から初転法輪に至るまでの叙述において、釈尊を指示するに際して「比丘」という表現で以て記述している箇所は一例も見出せない。①先祖の王から次第して、「悦頭檀有子。名菩薩。菩薩有子。名羅睺羅。北方國界雪山側釋種子」(T. 22, 779b)とあり、浄飯王の子としての釈尊の名は「菩薩」である。②そして仏伝中の地の文の成道に至るまでの記述は、一貫して「菩薩」を使用している。③摩竭王が釈尊に言及する際に代名詞「彼」を用いている。④釈尊が訪ねた二人の聖仙（阿藍迦藍および鬱頭藍子）は「瞿曇」と呼ばれている。⑤修行仲間の五人は各々釈尊を「瞿曇沙門」で以て示している。「時五人各各厭捨而去。自相謂言。此瞿曇沙門狂惑失道。豈有真實道耶」(T. 22, 781a)と、修行が成就せず苦行を捨て去った時の釈尊を批判するときに使用されている。⑥成道後の地の文に於いては、これまで一貫して使用されてきた「菩薩」の語に代わって、「世尊」「佛」「如来」の語が使用さ

第9部会

れている。このことは会話文の中においても同様である。⑦成道後の釈尊に初めて会った時の五比丘の釈尊への呼び掛けは「汝」「瞿曇」という表現である。「五比丘遙見世尊來。各各相誠救言。此瞿曇沙門。行不著路迷荒失志。若來至此。汝等莫與言語。亦莫禮敬。更別施小座令坐。」(T. 22, 787c) 五比丘の「汝」「瞿曇」の使用に対し、釈尊はこの語で以て自身に呼び掛けることを禁止される。「五比丘見如來坐已。皆稱名汝如來。時佛告五比丘言。汝等莫稱名汝如來。至真等正覺。如來威神無量最勝。汝若稱名汝如來。長夜受苦無量。」(T. 22, 787c) 仏陀となった釈尊に対し不適切であると。

三、釈尊の出家の描写については鬚髪を剃り、袈裟を著し、家を出て、鉢を持ち乞食するとある。これは正しく受戒する時に必要な条件である。釈尊はここで比丘となったと言ってよからう。従ってこの時点以降の地の文は釈尊を示すのに「菩薩」ではなく、「比丘」と表記するのが妥当であろうが、そのようにはなっていない。

むすび

出家すると同時に比丘になったと見なすことが自然と思われるけれども、律藏の立場からは、比丘から仏陀になるとすることとは何か不都合なことがあるのかもしれない。比丘が修行しても仏陀になることは不可能であり、ただ菩薩のみが可能である、という前提があるかと思われる。そうであるならば地の文の「菩薩」と名(幼名)の「菩薩」とは質的に区別されるべきであろう。他の諸律の検討により解決の手掛かりが得られるであろう。

吉蔵と『撰大乘論』

藤野 泰 二

本稿は、吉蔵(五四九—六二三)の『撰大乘論』に対する扱い及び著作中における『撰大乘論』の引用の調査とその理解について、仏身論の問題と絡めて考察したものである。

吉蔵の著作中における『撰大乘論』の引用を調べると、明確に書名を挙げて『撰大乘論』を引用・関説している箇所が見られたのは現存二六部のうち一七部である。『撰大乘論』を引用・関説している回数、『法華玄論』四九回、『勝鬘寶窟』二七回、『中觀論疏』二六回、『法華論疏』二四回、『法華統略』一八回、『法華義疏』一五回、『大乘玄論』一三回、『百論疏』九回、『淨名玄論』八回、『十二門論疏』六回、『維摩經義疏』三回、『法華遊意』二回、『三論玄義』一回、『仁王般若經疏』一回、『金剛般若經疏』一回、『觀無量壽經義疏』一回、『維摩經略疏』一回であり、総数は二〇五回である。

次に、吉蔵の仏身論について、特に法身と応身との関係について考察する。吉蔵の仏身論の特徴として挙げられるのは、吉蔵が經・論において説かれる仏身論をまとめあげようとする態度である。吉蔵は当時までに現れていたさまざまな仏身論の教説を収集し、それらを会通しようとして努力している。そのため多くの經・論の引用をなし、それぞれの仏身論を併記する。吉蔵は『法華玄論』において諸經・論の仏身論(二身説・三身説・